

不空の長安仏教界台頭とソグド人

中 田 美 絵

はじめに

密教僧不空三藏は、安史の乱（七五五年）を契機に長安仏教界で頭角を現し、訳経や法会を積極的に行なうなどして、長安仏教を隆盛に導いた。拙稿「中田二〇〇六」^①では、不空が長安仏教界に台頭していった理由として、不空を取り巻く人的なつながりに着目し、禁軍を率いる宦官勢力（以下、宦官・禁軍勢力）の存在が背後にあったことを指摘した。宦官は、安史の乱後、禁軍の軍事力をバックに勢力を伸張し中央政界に影響力を持つようになるが、「内廷」の宦官が政治の表舞台たる「外廷」に進出するには、不空の仏教は欠くことができなかった。宦官・禁軍勢力は不空と結びついて仏教を支配のイデオロギーに仕立てあげ、さらに仏教儀礼を通じて、宦官が内廷から外廷に進出するための正当化を行なった。宦官・禁軍勢力にとって、仏教は自らの政治的立場を確立する上で欠くことの出来ないものであり、彼らこそが不空の仏教活動を支えていたのである。

他方、この宦官・禁軍勢力の支持に加えて、不空とソグド人との結びつきについても見逃すことはできない。不空が活躍した八世紀は、ソグド人が中央アジアから中国内地にまで交易ネットワークを張り巡らせ商業活動を展開

し、さらにソグド系の武人が安史軍やその後の河北に成立した河朔三鎮下において活躍するなど経済・軍事面において重要な役割をになっていた。しかも、不空自身がソグド人である可能性が高いといわれている〔梅尾一九三三、松長一九七三、藤善一九八八、同二〇〇四／Chou 1945；Gernet 1996等〕⁽²⁾。不空の伝記史料のうち、作成時期の最も古い『飛錫碑文』（大暦九（七七四）年七月六日）によると、不空の父親は北天竺出身で、両親は不空が幼いころに亡くなり不空は十歳で母方のおじにつれられ武威（涼州）にしばらく滞在したという。さらにはほぼ同時期の作とされる『行狀』では、不空は「西良府」⁽³⁾の出身で、母親はソグド姓の一つである康（サマルカンド）姓であり、十歳のときにおじに武威につれられていったとある。⁽⁴⁾ 両史料から、不空はソグド人の血を引き、幼少期にはソグド人集落のある涼州に滞在していたとみられる。また、不空はソグド姓を冠する人々を得度（出家）させているように〔陳二〇〇二、九〇頁／陳・劉二〇〇六、三三二—三三三頁〕、ソグド人に密接に関わっている。さらに、本稿で明らかにするように、不空の支持者には多くのソグド人がみられ、宦官とも深く結びついている。すなわち不空が台頭していった背景は宦官・禁軍勢力とそれと結びついたソグド人の動向を視野にいれて考察する必要がある。

不空とソグド人と宦官・禁軍勢力との関係でまず注目すべきことは、不空が天宝十三（七五四）載に、河西・隴右節度使の哥舒翰に招聘されて涼州に赴いて行なった仏教活動である。⁽⁵⁾ 哥舒翰は、突騎施（トウルギシユ）哥舒部出身で代々安西に居していたが、天宝六（七四七）載には隴右節度使に、天宝十二（七五三）載には涼国公に封じられ、さらに河西節度使の任についた。⁽⁶⁾ 塚本俊孝・山崎宏両氏は不空が哥舒翰やその配下の支持を得たことは不空の安史の乱後の長安仏教界での展開に大きく関わるとみている〔塚本一九五二、九七頁／山崎一九六七、二四三頁〕。一方、

藤善真澄氏は、河西は長安から遠く離れた地であるだけでなく、不空は安史の乱勃発によって皇帝に呼び戻され、わずか一年しか河西にいなかったこと、また哥舒翰の安史の乱での潼関敗績の罪を考えれば、哥舒翰の存在は不空教団の発展とは直結できないとする。むしろ不空が安史の乱で唐に協力するなど動乱を活力源に組みかえ政界に確実な地歩を築き上げていったことこそが重要とする「藤善一九八八、三六六―三七一、三八〇―三八三頁」。しかしながら、安史の乱後に不空が長安で行なった仏教活動には、涼州につながりのあるソグド人と思しき人々が関わっていることから、哥舒翰配下での仏教活動が何の影響も与えなかったとは思えない。不空の長安仏教界台頭の要因を探るには、不空の背後にある勢力がどのように形成されていったのかを明らかにする必要がある。それには、やはり安史の乱以前の涼州での仏教活動を切り離して考えることは出来ないのである。

以上のような見地から、本稿では不空が長安仏教界に台頭していく過程において重要な役割を果たした不空の人物脈面の解明を試みたい。まず第一章で、安史の乱以降の不空の仏教活動を支持した涼州につながりのあるソグド系の人物が、何故不空と関わりを持つようになり、いかなる仏教活動に関わったのかを述べる。そして、彼らは不空の最大支持者たる宦官・禁軍勢力とも結びついていたことを明らかにしたい。次に第二章で、宦官・禁軍勢力が何故涼州出身のソグド系の人物を取り込もうとしたのかを、特に宦官の軍事力拡大という状況から考察する。第三章で、不空が得度させたソグド人僧侶を取り上げ、それらが宦官・禁軍勢力と如何なる関係にあるのかを述べ、最後に不空の支持者層の全体像を明らかにしてみたい。

第一章 不空を支持した涼州ソグド系武人

安史の乱勃発以降に不空を支持した人物のうち、李抱玉・羅伏磨・史元琮・辛雲京といった涼州出身、または哥舒翰とのつながりで涼州に何らかの関係のある武将が、不空の仏教活動において重要な役割を果たしている。では、彼らはどういった経緯で不空の仏教事業を支持するに至ったのであろうか。まず、この点について、不空が涼州にいる哥舒翰に招聘され、そこで行なった活動に着目する必要がある。

(1) 哥舒翰の下での灌頂儀礼の意義

哥舒翰のもとで不空が行なった仏教活動のうち、哥舒翰配下の武将らと不空とが結びつく上で重要なのは、灌頂儀礼であろう。

十二載、勅すらく、河瀧^{マミ}節度御史大夫哥舒翰の請う所に赴かしむ。十三載、武威に到り開元寺に住す。節度已下一命に至るまで、皆灌頂を授けらる。士庶之類、數千人衆は、咸な道場に登る。〔行狀〕、二九三頁⁽⁷⁾

不空は武威城内の開元寺にとどまり、哥舒翰の配下、つまり河西・隴右節度使下の一兵卒に至るまですべてに灌頂を授けた。密教の灌頂には、修行を積んだ僧に法を伝えていくために授ける伝法灌頂、密教を学んで弟子となるものに授ける弟子灌頂、そして多くの人々に仏縁を結ばせるために授ける結縁灌頂がある。ここでは、弟子灌頂が結縁灌頂を授けたとみられる。岩崎日出男氏は、哥舒翰らが辺境防衛の責務を担った立場から、灌頂のもつ「息災増

益」「降伏歓喜」「滅群兇」などの現実的な効力に期待が寄せられたと指摘する「岩崎一九八六、四八頁」。さらに付け加えるならば、河西・隴右という場所柄、哥舒翰軍は蕃漢の兵からなっており、この雑多な軍団を統率するためには、灌頂で皆に仏縁を結ばせ精神的統合をはかる必要があったと考えられる。

哥舒翰は、天宝十四（七五五）載には安史の乱鎮圧のために涼州を離れ、その後まもなく死亡し、一方、不空は長安に戻るため、ここ涼州での哥舒翰を頂点とする武將とのつながりは解消されたかにみえる。しかしながら、実際は、以下にみるように、哥舒翰配下の武將は、長安においても引き続き不空の仏教事業を支えていた。では、李抱玉・羅伏磨・史元琮・辛雲京の事例を取上げ、不空とどのような関係であったのかをみてみたい。

(2) 李抱玉・羅伏磨・史元琮・辛雲京

a. 李抱玉

李抱玉は、もとは安（フハラ）姓をもつソグド人で安重璋といい、北周のころから涼州に基盤をおく安氏一族で、武徳の功臣安興貴の末裔にあたる。李抱玉自身が、安氏一族は「世占涼州」『新唐書』卷一三八「李抱玉伝」と述べるように、安氏一族は安史の乱以前まで涼州に基盤をおいており、涼州の政局を左右し続けていた。⁽⁸⁾ 不空が涼州に来たのは安史の乱以前であるから、このとき李抱玉は不空に接し、灌頂を授けられた可能性が⁽⁹⁾あろう。

安史の乱期には、契丹族の武將李光弼の配下で反乱鎮圧にあたり功績を挙げていた。至徳二（七五七）載に李姓を賜り、乾元二（七五九）年に籍を京兆に移した「具一九九七、三三五—三三六頁、注129」。そして、右羽林軍大將軍、

つまり中央の護衛親軍である北衙禁軍（左右羽林・左右龍武・左右神武の六軍）の一つ右羽林軍の長官になり、乾元二（七五九）年までその地位にあったことが確認できる『舊唐書』卷一三二 李抱玉伝。その後、沢潞・鳳翔節度使等となり、哥舒翰と同様に涼国公に封じられている『新唐書』卷一三八 李抱玉伝。

李抱玉と不空とに接点があったことは、大暦九（七七四）年の不空の葬儀における史料の記述からみてとることができる。不空の葬式では、「宰臣・百辟、曾て法印を受けし者は、哀慟せざる罔く、門人勅常修功德使檢校殿中監大興善寺沙門大濟等四部の弟子凡そ數萬人は、大夜の還昏を痛み、慧燈の永滅を悲しむ。」「表制集」卷四「大唐故大德開府儀同三司鴻臚卿肅國公大興善寺大廣智三藏和上之碑」とあつて、宰相以下百官らのうち、不空から「法印」（密教の印相・印契のこと、仏・菩薩の働き・誓願・功德等を手指の組み合わせ（手印）などで象徴的にしめす）⁽¹¹⁾を授かつたもので悲しまないものはなかったという。そして、その死に対し、五名のものが祭文を書いている『表制集』卷四（第11・12・13・17・18首）。そのうち僧侶の慧勝一人を除くと、鄧国夫人張氏⁽¹²⁾・宦官の劉仙鶴・大暦年間に専權を振るい崇仏家といわれた宰相元載、そして李抱玉といった在家の人々からなっていた。彼らは不空から「法印」を授かつた人々の代表とみられ、李抱玉もそのうちの一人であつたことがわかる。また、『表制集』には、不空の仏教事業を認可する勅牒等に宰相の署名が列挙されているが、『表制集』卷二「請捨衣鉢助僧道環修金閣寺制一首」は、不空が五臺山金閣寺修築を上奏し、それに対し永泰二（七六六）年に認可を与えた勅牒であるが、これには、李抱玉が「檢校左僕射平章事」として元載・王縉・杜鴻漸⁽¹³⁾とともに宰相の列に加わつて認可の署名を行なっている。このことは、李抱玉の金閣寺整備に対する積極的な関与があつたことを物語っており、李抱玉は宰相としての政治

的立場を利用して、不空の仏教活動を支持していたとみられる。

b. 羅伏磨

『表制集』卷二「請降誕日度三僧」によれば、不空が長安で活動していた大曆三（七六八）年十月十三日に不空の上奏によって、三人が得度され、僧侶となることが認可されている。これら得度された僧侶には、おのおの本名に続いて、年齢・本貫地・法名・配属寺院等が記されている。このなかに、羅伏磨という涼州出身の人物が含まれている。

羅伏磨 年四十五 寶應功臣・〔昭〕武校尉・守右羽林軍大將軍・員試大常卿・上柱國・賜紫金魚袋・貫涼州天寶縣高亭鄉。法名惠成。請住化度寺

羅姓は、ソグド姓のひとつである。¹⁴涼州には安姓にとどまらず康姓や、羅姓の者がいたことが確認されていることから〔榮一九九九（二〇〇一、六八―七四頁）〕、羅伏磨もこれらと同様に、中央アジアからある時期に涼州に移住してきたか、その後裔であろう。

史料中に「寶應功臣」とあるが、宝應は代宗の即位時の年号（七六二年）であり、安史の乱を完全に鎮圧した広徳元（七六三年）の前年に当ることから、羅伏磨は安史の乱の時期に軍功をあげたと考えられる（詳細は後述する）。羅伏磨が、唐軍に入った時期については、天宝十四（七五五）載に哥舒翰が「河・隴・朔方の兵・蕃兵、高仙芝の舊卒あわせて二十萬」を率いて潼関に向かったときか『舊唐書』卷一〇四 哥舒翰伝、至徳二（七五七）載二月に肅宗が靈武から鳳翔に進んだ際に、「隴右、河西、安西、西域の兵皆な會」〔資治通鑑〕卷二一九 至徳二載二月条〕し

不空の長安仏教界台頭とソグド人 中田

第八十九卷 二九九

たときのいずれかの段階とみられる。

また、羅伏磨は「右羽林軍大將軍」、すなわち、李抱玉と同様に北衙禁軍右羽林軍の大將軍であった。そして、大曆三（七六八）年に不空の上奏によつて僧侶になり、長安城内の化度寺に配属された。化度寺では、この前年の大曆二年から、不空が一四名の僧侶を選出し、彼らに寺内の護国萬菩薩堂で毎年三長齋月（正・五・九月）に国家安泰のための念誦を行なわせるようになっていた『表制集』卷二「請抽化度寺萬菩薩堂三長齋月念誦僧一七人」。この護国萬菩薩堂は、不空によれば「化度寺護國萬菩薩堂は竝な臺山文殊の見（あらわ）る所に依れば、雲に乘じ象に駕し、楹梁を凌亂し、光明堂を満たすこと金閣に異ならず」ということ⁽¹⁵⁾から、五臺山に文殊が出現する様子に基づいて作ったもので、（文殊の）光が護国萬菩薩堂を満たす有様は五臺山金閣寺と変らなかつたという。護国萬菩薩堂での念誦は、金閣寺修築（永泰二（七六六）年）の翌年から実施されることもあわせて考えれば、化度寺護国萬菩薩堂では本寺たる五臺山金閣寺の別院として金閣寺と連動して国家仏事が行なわれていたのであろう。羅伏磨は化度寺に配属されたことで、こうした金閣寺関連の仏事にも関わっていたとみられる。

c. 史元琮

史元琮は、史国（キッシユ）出身のソグド人である可能性があるが、出自を明確に記したものはない。天宝二（七四三）載に不空がスリランカ・インドに赴いたときに、史元琮も一緒に行つたとみられており「藤善一九七六、八三三頁」、不空が哥舒翰のもとに赴く以前から既に両者には接点があつたことが分かる。そして、『飛錫碑文』・『行状』によれば、不空が哥舒翰に招聘されたとき、史元琮も涼州におり、不空は五部灌頂と金剛界大曼荼羅を授け、

ここで史元琮は不空と師弟関係になったことがわかる。ただし、史元琮がこの時何故涼州にいたのかは定かでない。この点について、塚本俊孝氏は史元琮をもともと涼州に基盤をもつ「胡人」ととらえ「塚本一九五二、九四頁」、藤善真澄氏は、史元琮は中央から派遣された宦官であり、哥舒翰の監軍使（または監軍使の副使か判官）として不空よりも先に涼州に居り、彼こそが不空招聘を哥舒翰に促したとする「藤善一九八八、三七六―三八〇頁」。ただし、史元琮は宦官・監軍使である可能性と同時に、その姓からみてソグド人である可能性もあり、さらに史元琮は哥舒翰や李抱玉と同様に涼国公に封じられていることから、涼州に基盤をおいていたソグド人である可能性もある。つまり、史元琮は幼少期に涼州に滞在していた不空とはいわば同郷であって、両者は宦官と僧侶という関係で結びついたというよりは、むしろ同郷のソグド人同士で常に行動をともしていたとみることもできる。

安史の乱勃発後は、肅宗乾元三（七六〇）年閏四月十四日に史元琮自身が上奏を行なうまで、その足取りは明らかでない。乾元三年閏四月十四日には、肅宗はすでに靈武から長安に戻ってきていることから、史元琮の上奏は長安で行なわれたものであり、このときすでに涼州から長安に移っていることがわかる。上奏のなかで史元琮は不空のために大興善寺に灌頂道場を設けるよう請うた。また、史元琮は代宗大暦年間には仏教界を管理する功德使に任命されることから、俗界から常に不空の仏教事業を支えていたとみられる。代宗永泰元（七六五）年六月十八日の勅牒では、史元琮は北衙禁軍の「龍武軍將軍」を帯びている「『表制集』卷一「杜中丞請迴封入翻譯制一首」⁽¹⁷⁾。すなわち、李抱玉・羅伏磨と同様、北衙禁軍の一員になっている。またこの勅牒では李姓に改めている。永泰元年以前において「史」姓を使用していた最後の例は、先ほどの乾元三（七六〇）年閏四月十四日の上奏文であることから、

改姓したのは乾元三年閏四月十四日以降、永泰元年六月十八日以前のことになる。安史の乱鎮圧、または広徳元(七六三)年十月の吐蕃の長安進入の際に軍功を挙げて李姓を賜ったとみられる。肅宗至徳年間に、安祿山を忌み嫌ってソグド姓の安から李姓に変える処置がなされた例があることから〔榮二〇〇三、一〇五頁〕、反乱の首謀者の一人である史思明と同姓の史元琮が李姓を賜うのも同様の意図があつてのことであろう。

d. 辛雲京

辛雲京は、蘭州金城の出身で〔新唐書〕卷一四七 辛雲京伝、河西地域の有力な豪族(「河西之大族」)であり、代々軍を統べ、兄弟は皆将帥であつた〔舊唐書〕卷一一〇 辛雲京伝。辛姓は漢族の姓ではあるが、敦煌のソグド人集落である從化郷には辛姓をもつものが三人おり、さらに辛姓にはイラン系の名前を持つ例があることから胡姓の疑いがあるといわれている〔池田一九六五、六〇頁〕。また、金城はソグド商人の活動都市であり〔榮一九九五(二〇〇一、二九一頁)〕、ソグド人集落があつたとみられることから辛雲京もa-cと同様にソグド系の人物である可能性が高い。安史の乱以前の活動は不明であるが、乱勃発後は、営州出身の高麗人である王思礼に偏将として仕えていたことが確認できる〔舊唐書〕卷二二七 張光晟伝。王思礼は、安史の乱以前は、哥舒翰とともに河西節度使の王忠嗣のもとに衙将として仕え、次に哥舒翰が隴右節度使になるとこれに仕え、さらに共に安史の乱鎮圧にあたるなど、哥舒翰・王思礼は常に行動を共にしていることから〔舊唐書〕卷一一〇・新唐書〕卷一四七 王思礼伝、辛雲京は安史の乱以前から哥舒翰・王思礼のもとにいたと考えられる。とすれば、辛雲京は哥舒翰のもとで不空に灌頂を授けられた可能性が高い。

辛雲京は代宗宝応元（七六二）年に河東節度使となり、後述するように、李抱玉と結託して僕固懷恩に対抗するなど、李抱玉とは密接な関係にあった。両者はともに河西における名族であることから、同郷人として既に何らかのつながりがあったのであろう。そして辛雲京は、五臺山金閣寺にも深く関わっていた。大暦一（七六七）年に、不空の上奏によって、金閣寺をふくむ五臺山の五寺で国のために読経や転読の仏事を行なうことと、この仏事のために五臺山の五寺それぞれで僧侶一四名を得度し、さらに諸州から道行僧七名を選んで、計二一名を五寺それぞれに配属することが認可される¹⁹。このとき、不空は「望委雲京・將軍宗鳳朝與中使魏明秀、又修功德使沙門含光簡擇」と述べ、雲京・宗鳳朝・魏明秀・含光の四人に二二名の僧侶を選ばせた。この雲京こそ当時河東節度使であった辛雲京に他ならない。

以上 a～d より、次のことが言えるであろう。李抱玉・羅伏磨・史元琮・辛雲京はいずれも安史の乱勃発以前には哥舒翰のもとにいたと考えられることから、ここで不空に接していた可能性が高い。そして、安史の乱勃発後は、羅伏磨は不空の弟子になり、史元琮は不空のために大興善寺に灌頂道場を設けるよう上奏するなど、不空の仏教活動を支えている。また、李抱玉も宰相として不空の仏教事業実施に果たした役割も少なからずあったであろう。さらに、李抱玉・辛雲京・羅伏磨は、五臺山金閣寺にかかわる諸仏事に関わっていることから、彼らは、不空が長安で仏教活動を展開する上で欠くことができない存在であったことがわかる。次に問題となるのは、これらの武將と、不空の最大支持者たる宦官・禁軍勢力とがいかなる関係にあったかということである。この点について次にみてみたい。

(3) 宦官・禁軍勢力との関係

まず、李抱玉・辛雲京と宦官との関係について、不空と宦官魚朝恩とが永泰元（七六五）年に『仁王経』翻訳・法会を行なうきっかけとなった僕固懷恩の反乱との関連から述べてみたい。僕固懷恩は九姓鉄勒に属する僕固部出身のトルコ人武將で、安史の乱では郭子儀らとともに鎮圧にあたり戦功をあげた。ところが、懷恩の娘は自らと同じ九姓鉄勒に属するウイグルの可汗（牟羽可汗）に嫁いでおり、懷恩の背後にウイグルの存在があることから、これを危険視するものが多かった。その筆頭が、いずれも不空の仏教事業に携わった魚朝恩・駱奉仙・辛雲京・李抱玉であった。⁽²⁰⁾

友永植氏は、魚朝恩と僕固懷恩との対立の背景を、郭子儀にさかのぼって検討している。乾元二（七五九）年三月に郭子儀以下九節度使からなる安慶緒征討軍が敗戦した際、魚朝恩は郭子儀を誹謗し、郭子儀の朔方節度使及び兵馬元帥を解任させた。また、宝応元（七六二年）に史朝義征討軍を編成するに際し、魚朝恩は郭子儀が副元帥になることを徹底的に阻止した。これは、魚朝恩が軍政を牛耳り戦功を独占しようと図ったためであったとしている。そして、次に天下兵馬副元帥に任じられたのが僕固懷恩であった。軍功右に出るものなく、ウイグル可汗の舅でもあった僕固懷恩の存在は、魚にとって国内における巨大な軍事的対抗勢力であった、とする「友永一九九四、二二―二五頁」。僕固懷恩は、安史軍同様、唐朝を覆しうる強大な軍勢力を有していた。友永氏が指摘するように、安史の乱を契機に禁軍・神策軍を牛耳ることに成功し、その軍勢力をバックに政治基盤を固めたい魚朝恩にとって、自らの存在を脅かす僕固懷恩は目障りな存在であったに違いない。

すでに宝応元（七六二）年十一月ごろから辛雲京（宝応元年から河東節度使）と李抱玉（宝応元年から陳鄭・沢潞節度使）は、僕固懷恩に二心ありという上奏をするようになり、⁽²¹⁾ 広徳元（七六三）年七・八月には、辛雲京・李抱玉と懷恩との対立がより明確になる。以下、『資治通鑑』「卷二三 廣徳元年七・八月条」の記述にそつてみてゆきたい。

初め、僕固懷恩は詔を受け回紇の可汗と太原に相い見えんとす。河東節度使辛雲京は可汗は乃ち懷恩の壻なるを以つて、其れ合謀して軍府を襲うを恐れ、城を閉じて自守し、亦た犒師せず。史朝義既に平らぐに及び、懷恩に詔して可汗を送りて出塞せしむるに、往來して太原を過ぐるも、雲京は亦た城を閉じて與に相聞せず。懷恩は怒りて、具さに其の狀を表すも、報えず。懷恩は朔方兵數萬を將いて汾州に屯し、其の子御史大夫瑒をして萬人を將いて榆次に屯せしめ、裨將李光逸等をして祁縣に屯せしめ、李懷光等をして晉州に屯せしめ、張維嶽等をして沁州に屯せしむ。…

中使駱奉仙は太原に至るや、雲京は厚く之と結び、懷恩は回紇と連謀し、反狀は已に露わると爲言す。…八月、癸未（十八日）、奉仙は長安に至るや、懷恩の謀反を奏す。懷恩も亦た具さに其の狀を奏し、雲京・奉仙を誅さんことを請うも、上は兩に問う所無く、優詔もて之を和解せしめんとす。⁽²²⁾

史朝義討伐に協力したウイグルが漠北へ戻っていくさいに、僕固懷恩はウイグルの可汗と太原で会見することになっていた。ところが、辛雲京は可汗と僕固懷恩が結託して太原を襲うことを恐れ、城を開けなかった。これに怒った懷恩は、自ら率いる朔方の軍を、太原を南方から取り囲むように、汾州・榆次・祁県・晉州・沁州に配置した。このとき、宦官駱奉仙が太原に行くと、辛雲京はこれと結びつき、さらに辛雲京は駱奉仙に僕固懷恩がウイグルと共に

謀して反乱を起こそうとしていると偽って伝えた。駱奉仙は、魚朝恩とともに不空の『仁王經』翻訳事業に参加するなど、魚朝恩の腹心であった。もともと駱奉仙は僕固懷恩の監軍使で、⁽²³⁾両者は義兄弟の契りを結んでいた『資治通鑑』卷二三三「廣德元年」ところが、ここで駱奉仙は懷恩を裏切って辛雲京と結託し、帰京後には懷恩が謀反を企てていると上奏したのである。懷恩はこれに対し、代宗に上奏し、駱奉仙と辛雲京を誅するよう請うた。懷恩はその上奏の中で、次のように述べている。

「臣は昨に詔を奉じて可汗を送りて歸國せしむるに、家貲を傾竭し、之をして上道せしめんとす。行きて山北（太原）に至るも、雲京・奉仙は城を閉じて出でて祇迎せず、仍お潜行して竊盜せしむ。回紇は怨怒し、亟に縱兵せんと欲すれば、臣は力めて彌縫を爲し、方めて出塞するを得。雲京・奉仙は臣の先に奏論有るを恐れ、遂に復た妄稱・設備し、李抱玉と共に相い組織す。⁽²⁴⁾」

ウイグルの可汗が漠北に戻る際に太原に立ち寄るが、辛雲京・駱奉仙は城門を開けることなく、盗みをはたらき、これによってウイグルとは一触即発の状態にあったが懷恩自身がこれをおさえたという。辛雲京・駱奉仙は、懷恩がこのことを皇帝に報告することを恐れ、李抱玉とも結びついて、逆に懷恩のことを誣告するようになったという。⁽²⁵⁾ここで、辛雲京と李抱玉率いる軍団と宦官とが一緒になって、僕固懷恩に対抗していくのである。

次に、史元琮は永泰元（七五六）年には北衙禁軍の龍武軍將軍であることから、当時北衙禁軍を率いる魚朝恩の配下にあった。さらに『仁王經』の法会では、魚率いる北衙禁軍が参加するが、史元琮も実際にこの法会に参加していた「中田二〇六、五二頁」。そして、羅伏磨は大暦三（七六八）年以前に北衙禁軍の右羽林軍大將軍になっていた

ることから、彼もまた魚朝恩の配下の武將であり、『仁王經』の法会に参加していた可能性もある。

以上より、李抱玉・辛雲京・史元琮・羅伏磨は宦官と結びつき、特に僕固懷恩の乱鎮圧とそれに連動する『仁王經』法会に深く関わっていたことがわかる。では宦官はどういった背景の下で涼州の武將を必要とするに至ったのだろうか。次章で、宦官が安史の乱以降、自らの政治的基盤を確固たるものとするために、軍事力を強化していたことに着目して論じてみたい。

第二章 宦官の軍事力強化におけるソグド人の役割

宦官は、自らが率いる主力軍の北衙禁軍・神策軍以外に、飛龍使や射生軍の強化や、養子を集めることにも重きを置いていた。以下に見ていきたい。

① 飛龍使

飛龍使は、萬歲通天二（六九七）年に、仗内六閑（仗内閑廐ともいい、飛龍・祥麟・鳳苑・鵷鸞・吉良・六羣からなる）のひとつとして設けられた飛龍廐の管掌者である〔唐一九八九、二四九—二五〇頁／趙一九九一、一二六頁／同一九九二、一二二—一二三頁〕。飛龍廐は玄武門の北に設けられ、帝王の居所と宮外の連絡をつけるのに至便であることから、内外の情勢に応じて臨機応変に処置をとることができ、その結果、他の廐よりも重要視されるに至った〔趙一九九一、一二九—一三三頁／同一九九二、一二二—一二三頁〕。そして、この飛龍使には宦官が任命されることになっていた。

仗内六閑の長官は、閑廐使であるが、安史の乱以降になると、閑廐使は飛龍廐以外に馬を求めようがなくなり、飛龍廐が内廐の馬を供する主な廐となっていたとみられている。そのため、肅宗末・代宗期の程元振・魚朝恩がそれぞれ「飛龍閑廐副使」・「内飛龍閑廐使」であったように〔趙一九九二、一五五頁〕、飛龍使をもって閑廐使を兼任するようになり、次第に閑廐使は閑職となっていた〔唐一九八九、二五一頁／趙一九九一、一二七—一二九頁〕。肅宗初期の宦官李輔国の場合は、唐が長安を奪回してから閑廐使に任命されるものの、飛龍使については確認できない〔『舊唐書』卷一八四・『新唐書』卷二〇八 李輔国伝〕。ただし李輔国は「飛龍小兒」といわれ飛龍廐の出身であり〔『資治通鑑』卷二九 至德二（七五七） 載春正月条〕、不空に飛龍馬を与えるなど李輔国が飛龍廐の馬を自由に出入していることから〔中田二〇〇六、四四頁〕、李輔国は飛龍使を兼任していたと考えられる。つまり、李輔国の時期は、閑廐使の権限が飛龍使に移っていく過渡期にあったとみられる。

李輔国は閑廐使と同時に隴右群牧使にも任命され〔『舊唐書』卷一八四・『新唐書』卷二〇八 李輔国伝〕、このことは飛龍廐の発展において重要な意味を持っていた。隴右群牧使は、隴右の監牧地の長官である。李輔国以前に閑廐使と隴右群牧使を兼ねていたのは安祿山であった〔『資治通鑑』卷二二七 天寶十三載正月条〕。安祿山は、閑廐使の立場を利用し精銳の廐馬を范陽に帰し、唐に反抗する実力をたくわえたという〔『新唐書』卷五〇 兵志〕。さらに、隴右群牧使として、本来中央の廐にもたらされるはずの隴右の監牧地の良馬を范陽に供給していた可能性もあろう。安祿山にとって、閑廐使・隴右群牧都使は、軍事力増強の上で重要なポストであった。反乱後にこの両ポストを受け継いだのが李輔国であった。これによって隴右の良馬が中央の廐に、なかでも宮殿防衛の上で最も重要な位置にあ

る飛龍廐に供給されていったとみられる。⁽²⁷⁾

そして、飛龍廐の拡大において忘れてはならないのは、安氏一族の李抱玉と宦官勢力との結びつきである。『舊唐書』卷一三二「李抱玉伝によれば、「李抱玉は武徳の功臣安興貴の裔なり。代々河西に居り、善く名馬を養い、時の稱する所と爲る（李抱玉、武徳功臣安興貴之裔。代居河西、善養名馬、爲時所稱）」とあって、安氏一族は代々馬を養っていたといわれ、⁽²⁸⁾また、李抱玉の父である安忠敬は実際に河西節度使下の赤水・新泉軍の監牧使であった〔寧二〇五、一七八―一七九頁〕。⁽²⁹⁾安史の乱以降、李抱玉と宦官勢力とが結びついたことで、安氏一族が養っていた河西の馬が、宦官の管轄する飛龍廐に供給されたことも十分に考えられる。しかも、肅宗乾元三（七六〇）年には、史元琮が「内飛龍驅使」⁽³⁰⁾として飛龍廐の管理を行なっていることが確認できる。ちょうどこのころ李輔国が閑廐使であることから、史元琮は李輔国の配下にいたことになる。史元琮はこの職に就く以前は涼州にいたこと、また涼国公であることから、涼州を中心とする河西一帯での牧畜の状況を知り、李抱玉ともつながりがあったとみられる。史元琮を飛龍使に就任させることは、涼州からの馬を中央に供給させるのに好都合であったに違いない。肅宗至徳年間（七五六―七五八）以降、嵐州刺史が兼領していた樓煩監牧が内飛龍使に隸属したように、内飛龍使が直接管轄する監牧地がみられるようになってくることから〔寧二〇〇五、一七七―一七八頁〕、宦官は河西一帯についても、内飛龍使の直接影響下に置こうとしたと考えられる。このように、宦官は涼州の安氏一族と結びつくことで良馬を確保し飛龍廐を発展させようとしたとみられる。⁽³¹⁾

②射生軍

射生軍は、肅宗が鳳翔に臨時政府をおいた至徳二（七五七）載に騎射能力に優れたものが選ばれ衙前に設けられた。⁽³²⁾そして、この射生軍は宦官に率いられるようになる「趙一九九一、一三七・一三八頁、注⑨」。では、この射生軍はどのような人々から構成されていたのであろうか。それを解くには鳳翔の臨時政府に集められた兵士の実態を明らかにする必要がある。鳳翔にはコータン・安西・北庭及び拔汗那・大食そしてウイグル軍が集結し「森安二〇二、一三二—一三三頁」、さらに、隴右・河西・西域の兵も集っていた「資治通鑑」卷二一九至徳二載二月条。また、杜甫は、唐が鳳翔に拠点を置き長安を奪回する直前の状況をうたった「官軍已に賊寇に臨むと聞くを喜ぶ二十韻（喜聞官軍已臨賊寇二十韻）」「杜工部集」卷十のなかで、唐の援軍について「花門 絶漠に騰（あがり）り、拓羯 臨洮を渡る（花門騰絶漠、拓羯渡臨洮）」といっている。⁽³³⁾「花門」は遙かなる砂漠からはねあがってやって来て、「拓羯」は臨洮（隴右節度使下の臨洮軍、あるいは極西の地域を代表するという）を過ぎ鳳翔に向かったという。「花門」とはウイグルをさし、⁽³⁴⁾「拓羯」は、ソグディアナにおける君主に仕える直属の戦士集団チャカルの漢字音写である。⁽³⁵⁾すなわちウイグルが派遣した軍団とチャカル軍団がそれぞれ鳳翔にむかっていたという。この「拓羯」を額面どおりにとらえるとすれば、ソグディアナ方面から送られたチャカルの軍団であり、鳳翔に集結した軍のうち「西域」にふくまれるのであろう。ただし、鳳翔に集結した軍のうち、「大食」はアッバース朝の正規軍ではなく、当時トランスオクシアナに流入していた反アッバース勢力であるアラブの傭兵であることから「稲葉二〇〇一」、これが「拓羯」とみなされた可能性もある。⁽³⁶⁾このような状況をふまえれば、杜甫のいう「拓羯」とはチャカルに見間違うような西

方から鳳翔に向う非漢族の外国人兵士を漠然と指したのであろう。そして、隴右・河西・安西の兵士のうちにも非漢族が多く混ざっていたことはいうまでもない。すなわち、鳳翔に集められた兵士には非漢族の武人が多く含まれおり、そのうち騎射能力に優れたものが射生軍に編入されていたのであろう。

また、羅伏磨（b）が賜った「寶應功臣」は、射生軍の兵士にも与えられていた。

代宗即位するに、射生軍は禁中に入りて清難するを以って、皆な寶應功臣を賜名せらる。故に射生軍は又た寶應軍と號す。『新唐書』卷五〇兵志⁽³⁷⁾

清難とは、肅宗の皇后である張氏の陰謀を打倒したことを指している。皇后張氏は、皇太子俶を誘い宦官李輔国を打倒しようとするが拒否され、皇太子の弟越王係と結託するものの事前に宦官側に察知され、皇后張氏と越王は殺害される。そして、ここで宦官らによって皇太子が擁立され、代宗として即位する『資治通鑑』卷二二一寶應元（七六二）年四月条。この清難で射生軍が宮中を守護し、その功績で射生軍に「寶應功臣」の名を賜ったという。とすれば、羅伏磨も、涼州から鳳翔にやって来て射生軍に入り、その後、北衙禁軍の右羽林大將軍になった可能性もある。羅伏磨以外にも、涼州出身のソグド人である安暉（李國珍）は、「射生使」であり、「寶應功臣」の号も帯びている。⁽³⁸⁾ 靈武出身でソグド人の何遊仙は、安史の乱の際には肅宗に付き従い、「寶應元從功臣」の号を帯びていることから、安暉と同様に射生使であった可能性が高い。⁽³⁹⁾ このように、射生軍には、涼州や靈武などにあるソグド人集落のソグド系の武人が多く取り込まれていたとみられる。

では、宦官は射生軍をいつごろから率いはじめたのであろうか。最初に確認できるのは上元元（七六〇）年七月

で、宦官李輔国が「射生五百騎」を率いている〔『資治通鑑』卷二二二〕ことから、唐が長安を奪回して数年後には宦官の指揮下にあったことが確認できる。次に『資治通鑑』卷二二二の宝应元（七六二）年の記事によれば、肅宗末の政変発生直前に、飛龍殿副使の宦官程元振は「内射生使」を兼任し、皇太子（代宗）を擁立している〔趙一九九一、一三七頁〕。そして、魚朝恩は宝应元年に「射生五百人」を率い、史朝義軍と戦って大勝利をおさめている〔『資治通鑑』卷二二二 寶應元年冬十月条〕。また、魚朝恩は入殿するときには自らの護衛のために射生軍を率いていた〔『資治通鑑』卷二二四 大暦五（七七〇）年正月条〕。このように、李輔国・程元振・魚朝恩らは射生軍を自在に操り、いわば私兵化していたのである。

③養子

宦官は優秀な武人を養子として集め自らに忠実な軍事集団を組織していった。宦官魚朝恩の養子尚可孤、宦官駱奉仙の養子駱元光はその例である。

尚可孤は、鮮卑の宇文種の出身で、史思明の配下にいたが、肅宗上元中に帰順し、魚朝恩の目に留まり養子となった〔『舊唐書』卷一四四・『新唐書』卷一一〇 尚可孤伝〕。その後、長安西方の扶風・武功に置かれた神策軍の外鎮を任せられている。神策軍は魚朝恩の頃から中央の禁軍以外に外鎮をもつようになり、このことが他の禁軍よりも神策軍が強盛となった理由のひとつである〔日野一九七四（一九八〇、一三〇—一三五頁）、小畑一九六八〕。『資治通鑑』卷二二四 大暦五（七七〇）年正月条に、扶風・興平・武功・天興が神策軍に属することから、このころ尚可孤

が外鎮についたとみられている「小畑一九六八、二二―二三頁」。

いっぽう駱元光は、もとは安元光という涼州出身のソグド人で、⁽⁴⁰⁾徳宗期に李元諒と改める。駱元光は、「少從軍、備宿衛」〔舊唐書〕卷一四四 李元諒伝とあって、若くして禁中の衛士として仕えていたことから、禁軍に入っていたとみてよいであろう。駱元光は、その後、鎮国軍節度使李懷讓下の鎮国軍副使となり、潼関を拠点に十数年のあいだ軍を率いて駐留した〔舊唐書〕卷一四四 李元諒伝。鎮国軍節度使は、安史の乱中の上元二（七六一）年に華州に設けられた。華州および潼関は河北から長安に向かうルート上の要衝にあたり、駱元光は河北からやってくる賊軍の長安侵入を阻む大任を担っていた。このように、宦官は首都防衛のために長安の東西に自らの有能な養子を配置することで、中央の禁軍のみならず、外鎮をも自らのコントロール下に置き、勢力範囲を拡大していったのである。

以上のように、宦官は自らの軍事力強化の過程において騎射能力等に優れた武人たちを自らの支配下に置こうと努めていたが、なかでも哥舒翰の拠点であった涼州を中心とする河西・隴右地域については、人・馬の供給において重要視していたことがわかる。それゆえ、羅伏磨・李抱玉・史元琮のみならず、安（駱）元光・安暉（李國珍）といった涼州のソグド人が宦官勢力のもとに吸収されるのは自然の流れであった。そしてこれらは哥舒翰のもとにいたとみられることから不空の密教を通じて互いに結びつき、彼らが宦官とともに不空の仏教事業に多くの便宜を与えたと考えられる。

第三章 不空僧侶集團下のソグド姓僧侶と宦官・禁軍勢力

『表制集』によれば、不空は代宗の降誕日（十月十三日）を利用して、三度にわたって僧侶の得度申請を行ない、彼らを長安の各寺院（二人は洛陽）に配属させている。それぞれの申請は、(1)広徳二（七六四）年十月十九日 (2)大曆二（七六七）年十月十三日 (3)大曆三（七六八）年十月十三日に認可され、計一五名の僧侶を得度させた（表得度僧侶一覧）。これは、不空が自らの息のかかった僧侶集團を長安において拡大しようとしたためとみられる。このうち、ソグド系の姓をもつものは九名（(1)何光王／(2)畢數延・康守忠・畢越延・石惠臻・羅詮／(3)羅文成・羅伏磨・曹摩訶）である。(2)と(3)はソグド系の姓を持つもののみから構成されている。代宗の降誕日に得度されているということは、恩赦によって認可される「特恩度僧」であることから「諸戸一九九〇、二五二―二五六頁」、不空は代宗の降誕日をうまく利用して、積極的にソグド人を自らの配下に取り込もうとしていたとみられる。

(2)の「無州貫」の四名や、(3)の「土火羅」出身の羅文成は、前章で取上げてきた羅伏磨(3)のように安史の乱鎮圧のために鳳翔に集ってきた兵士か、乾元元（七五八）年七月に吐火羅葉護烏那多が来朝し安史軍討伐の協力を申し出ていることから『冊府元龜』卷九七三 外臣部 助國討伐、このうちの兵士であった可能性もあろう。その後、吐蕃によって河西回廊を遮断され本国に帰る手立てを失うなどの理由で長安に残留していたとみられる。(2)と(3)の僧侶が配属された寺院は、莊嚴・西明・化度・千福寺といった長安城街西に位置する（図 唐長安城）。街西の西市とその北の地域には、イラン系・トルコ系等の西域人が多数往来し、独自の社会文化を維持していた「妹尾一九八

表 得度僧侶一覧

得度時期	俗姓名	法名	年齢	出身地	配属先（坊名）	典拠
(1) 広徳2(764)年 10月19日	王	慧通	55	絳州曲沃縣	③千福寺(安定)	『表制集』 卷1「降誕 日請度七僧 祠部勅牒一 首」
	段	慧雲	23	京兆府長安縣	⑥大興善寺(靖善)	
	何光王	慧琳	30	號州閿鄉縣	⑥大興善寺(靖善)	
	王庭現	慧珍	33	京兆府萬年縣	⑥大興善寺(靖善)	
	?	法雄	28	京兆府富平縣	⑤靜法寺(延康)	
	胡	法滿	18	京兆府萬年縣	?	
(2) 大暦2(767)年 10月13日	畢數延	惠達	55	無州貫	②莊嚴寺(永陽)	『表制集』 卷2「請降 誕日度僧五 人制一首」
	康守忠	惠觀	43	無州貫	東京廣福寺	
	畢越延	惠日	43	無州貫	②莊嚴寺(永陽)	
	石惠璨	惠光	13	無州貫	④西明寺(延康)	
	羅詮	惠俊	15	無州貫	④西明寺(延康)	
(3) 大暦3(768)年 10月13日	羅文成	惠弘	30	土火羅國	④西明寺(延康)	『表制集』 卷2「請降 誕日度三僧 制一首」
	羅伏磨	惠成	45	涼州天寶縣	①化度寺(義寧)	
	曹摩訶	惠順	?	京兆府萬年縣	③千福寺(安定)	

不空の長安仏教界台頭とソグド人

中田

四、二〇―二頁」。また、ソグド人の住居は西市および祇祠のある坊付近に集中し、たとえば李抱玉は千福寺の隣の修徳坊に、涼州出身のソグド人で射生使の安暉（李國珍）は西市の東に隣接する光徳坊に邸宅を構えていた〔栄一九九九（二〇〇一、八一―八五頁）〕。おそらく不空は長安城内のソグド人が集中する立地にある寺院を選んでソグド人仏僧を配置し、彼らに布教させ、街西一帯に集まるソグド人らをも自らの影響下におき、支持者を獲得しようとしたのであろう。

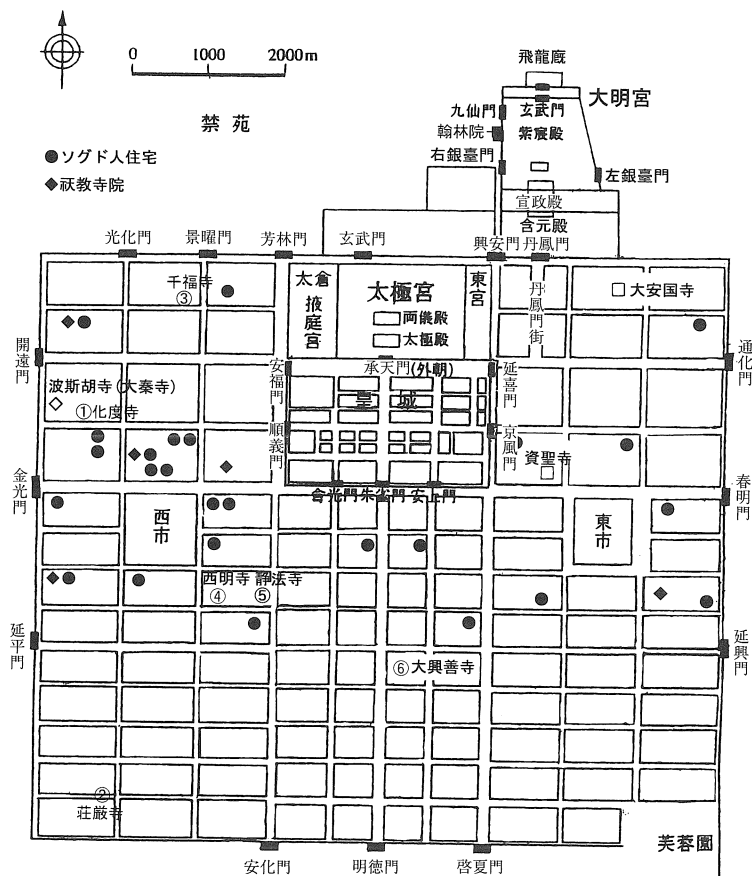
大暦年間（七六六―七七九）には、仏教教団を管理する功德使が登場するが、これに就いたのが龍武軍將軍の史元琮であった〔塚本一九三三（一九七五、二五五―二五七頁）〕。このことによつて史元琮は、不空の俗弟子として、禁軍と仏教界の管理という両方にまたがる活動をするようになる。いうまでもなく、不空のもとに集められたソグド姓の僧侶らも史元琮の管轄下に入ったことになる。そして、羅伏磨が、禁軍の大將軍から不空の弟子になるように、宦官・禁軍勢力と不空僧侶集

図 唐長安城

※妹尾達彦「中華の分裂と再生」『岩波講座 世界歴史9』1999年、40頁「図10 唐長安城の儀礼空間—7世紀から8世紀」をもとに作成。

※ソグド人住宅・祇教寺院の位置は、柴新江「北朝隋唐粟特人之遷徙及其聚落」『中古中国と外来文明』三聯出版社、2001年、82頁「図5 唐長安城内粟特人分布図」による。

※寺院の位置は、小野勝年『中国隋唐長安・寺院史料集成』法蔵館、1989年による。



団とは両グループ間で人材の移動が行なわれるほどに、密接に結びついていた。以上より、宦官・禁軍勢力および不空僧侶集団はそれぞれソグド人を多数抱え込み、しかも、史元琮や羅伏磨といった涼州に基盤をおくソグド系の武將を介して、互いに切り離せない関係になっていた。すなわち、宦官・禁軍勢力および不空僧侶集団は密接に結びついた一つの勢力なのであり、この勢力こそが、不空を長安仏教界に台頭させ、代宗期の仏教を隆盛に導いたのである。

おわりに

不空は安史の乱以前の涼州における哥舒翰のもとでの仏教活動で、支持者を獲得していった。そして不空が涼州を離れ長安に戻ってから、涼州を基盤とするソグド系の武將との協力関係がみられ、引き続き彼らの支持を得ていたことが確認された。つまり、不空にとって涼州での活動は長安での仏教活動を展開するうえでの準備段階であったといえる。

涼州の武將達は、安史の乱勃発後、不空の最大の支援者たる宦官・禁軍勢力と結びついていった。彼らが宦官と結びついたのは、このころ政治勢力として急成長した宦官が、その権力基盤のひとつである軍勢力を拡大する過程で騎射能力に優れた武人が必要としていたためである。宦官は、安史の乱鎮圧に協力すべく中央アジアや、河西・隴右・朔方などの方面から唐軍のもとに集ってきたソグド人を含む非漢族の武人を取り込んでいった。涼州の武將もまたこういった状況の中で宦官と結びつくことになったとみられる。宦官・禁軍勢力と、これらのもとに集めら

れたソグド人を中心とする武将らは、個々が複雑に結びつきあつて一体となり、さらに不空の僧侶集団とも混じり合つて、ひとつの勢力として不空の仏教活動を推し進めたのである。

本稿では、紙幅の都合上、ソグド人が何故不空の支援者となつたのか、何故宦官勢力と結びついていくのか、といったソグド人側の論理に立つた説明はなしえなかつた。これについては改めて論じる予定である。また、本稿でみてきたようなソグド人をはじめとする非漢族や僧侶集団は、権力の中枢の奥深くに出入りする宦官と結びつき、唐後半期において無視できない強力な勢力となつていったとみられる。だが、中央政界の圧倒的多数派は儒・道教を奉ずる人々である。そのため、このいわば安史の乱後の新興勢力は、中央政界の他の勢力との間に軋轢を生じていたであろう。その帰結ともいえる出来事が会昌の廃仏（八四五年）である。宰相李德裕らが廃仏を断行するに至つたのは、唐後半期に華夷思想が醸成されてきたことにより外来思想への反発が高まつたことが背景にあつたとされるが、その実は、その思想の背後にいる勢力、すなわち仏教を紐帯に結びついた宦官（禁軍）・ソグド人・僧侶集団の一扫を図つたのではないだろうか。今後は、以上の様な視点を持ちつつ、安史の乱から廃仏までの宦官（禁軍）・ソグド人・僧侶集団の動向に注目していきたい。

【略号】

・『表制集』：唐圓照撰『代宗朝贈司空大辨正廣智三藏和上表制集』、大正新修大藏經・史伝部五一。

・『飛錫碑文』：飛錫撰『大唐故大德開府儀同三司試鴻臚卿肅國公大興善寺大廣智三藏和尚之碑』。『表制集』卷四所収。

・『行狀』：前試左領軍衛兵曹參軍翰林待詔臣趙遷撰『大唐

故大德贈司空大辨正廣智不空三藏行狀」、大正新修大藏經・史伝部五〇。

・『貞元録』：唐圓照撰『貞元新定釋教目錄』三〇卷、大正新修大藏經・目錄部五四。

参考文献

【日文】

池田温一九六五「8世紀中葉における敦煌のソグド人聚落」

『ユーラシア文化研究』一、四九—九二頁。

稲葉稜二〇〇一「安史の乱時に入唐したアラブ兵について」

『国際文化研究』五、一六—三三頁。

岩崎日出男一九八六「不空と哥舒翰」『印度学仏教学研究』

三四—二、四六—六九頁。

岩本弘一九九六「『不空三藏行狀』の成立をめぐる」『印

度学仏教学研究』四五—一、九二—九四頁。

小畑龍雄一九五九「神策軍の成立」『東洋史研究』一八—二、

三五—五六頁。

——一九六八「神策軍の発展」『田村博士頌壽東洋史論

叢』田村博士退官記念事業会、二〇五—二二〇頁。

妹尾達彦一九八四「唐代長安の街西」『史流』二五、一—三

一頁。

趙雨楽一九九一「唐代における飛龍廐と飛龍使—特に大明宮

の防衛を中心として—」『史林』七四—四、一二二—一二三
九頁。

——一九九二「唐代における内諸司使の構造—その成立時
點と機構の初歩的整理—」『東洋史研究』五〇—四、一一
六—一六三頁。

塚本俊孝一九五二「中国に於ける密教受容について—伝入期
たる善無畏・金剛智・不空の時代—」『仏教文化研究』二、
八九—九九頁。

塚本善隆一九三三「唐中期以来の長安の功德使」『東方学報』

四、京都、三六八—四〇六頁（再録：同 一九七五『塚本

善隆著作集』第三卷、大東出版社、二五一—二八四頁）。

梅尾祥雲一九三三『秘密仏教史』高野山大学。

友永植一九九四「不空訳『仁王護国般若波羅蜜多經』小考」

『別府大学紀要』三五、一七一—一八頁。

中田美絵二〇〇六「唐朝政治史上の『仁王經』翻訳と法会—

内廷勢力専権の過程と仏教—」『史学雑誌』一一五—三、
三八—六三頁。

日野開三郎一九七四『支那中世の軍閥』（東洋文化叢刊）、三

省堂（再録：同 一九八〇『日野開三郎 東洋史学論集（1）』

三一書房、二四—一七一頁）。

藤善真澄一九七六「金剛智・不空渡天行釈義 中・印交渉を

手懸りに』『奥田慈應先生喜寿記念 仏教思想論集』平楽寺書店、八三—八三六頁。

一九八八「不空教団の展開」『中国の仏教と文化 鎌田茂雄博士還暦記念論集』大蔵出版、三六五—三八七頁。

二〇〇四『隋唐時代の仏教と社会 弾圧の狭間にて』白帝社。

前嶋信次一九六五「安史の乱時代の一二の胡語」『石田博士頌寿記念東洋史論叢』石田博士古希記念事業会、四一一—四二三頁。

松長有慶一九七三『密教の相承者』評論社。

森安孝夫二〇〇二「ウイグルから見た安史の乱」『内陸アジア言語の研究』一七、一一七—一七〇頁。

二〇〇七『シルクロードと唐帝国』（興亡の世界史、第五巻）、講談社。

諸戸立雄一九九〇『中国仏教制度史の研究』平河出版社。

山崎宏一九六七『隋唐仏教史の研究』法蔵館。

山下将司二〇〇五「隋・唐初の河西ソグド人軍團—天理圖書館藏『文館詞林』『安修仁墓碑銘』殘卷をめぐる—」『東方學』一一〇、六五—七八頁。

吉川幸次郎一九八〇『杜甫詩注』四、筑摩書房。

吉田豊一九九八「Sino-Iranica」『西南アジア研究』四八、三三—五一頁。

【中文】

陳海濤二〇〇二「唐代入華粟特人的佛教信仰及其原因」『華林』二、八七—九四頁。

陳海濤・劉惠琴二〇〇六「来自文明十字路口的民族——唐代入華粟特人研究」商務印書館、北京。

李鴻賓一九九六「論唐代宮廷內外的胡人侍衛——從何文哲墓誌銘談起——」『中央民族大学學報』一九九六—六、三九—四四頁。

孟楠一九九三「回紇別称『花門』考」『西北史地』四（總五十二）、三九—四三頁。

寧志新二〇〇五『隋唐使職制度研究（農牧工商編）』中華書局。

榮新江一九九五「祆教初伝中国年代考」『国学研究』三、三三五—三五三頁（再録：同二〇〇一『中古中国与外来文明』三聯出版社、二七—三〇〇頁）。

一九九九「北朝隋唐粟特人之遷徙及其聚落」『国学研究』六、二七—八六頁（再録：同二〇〇一『中古中国与外来文明』三聯出版社、三七—一一〇頁）。

二〇〇三「安史之乱後粟特胡人的動向」『暨南史學』

二、一〇二—一二三頁。

唐長孺一九八九「唐代的内諸司使及其演變」『山居存稿』中華書局、二四四—二七二頁。

吳玉貴一九九七「涼州粟特胡人安氏家族研究」『唐研究』三、二九五—三三八頁。

趙雨樂一九九四「唐宋變革期之軍政制度—官僚機構與等級之編成」文史哲出版社。

【論文】

Beckwith C. I. 1984 Aspects of the Early History of the Central Asian Guard Corps in Islam, *Archivum Eurasiae Medii Aevi* 4, pp.29-43.

Chou Yi-Liang (周一良) 1945 Tantorism In China, *Harvard Journal of Asiatic Studies* 8, pp.241-332. (錢文忠訳一九九六『唐代密宗』上海遠東出版社)

De La Vaissière, É. 2005 *Čākar sogdiens en Chine*. In: De La Vaissière / Trombert (ed.), *Les Sogdiens en Chine*, Paris, pp.255-260.

Grenet F. 1996 Les marchands sogdiens dans les mers du Sud à l'époque préislamique. In: *Inde-Asie centrale. Routes du commerce et des idées*, (Cahiers d'Asie Centrale1-2), Tachkent / Aix-en-Provence, pp. 65-84.

不空の長安仏教界台頭とソグド人 中田

註

(1) ここでは、北衙禁軍と神策軍をさす。神策軍は河西に置かれた辺境軍であったが、安史の乱鎮圧のため東方に移動し、永泰元(七六五)年十月に禁軍に昇格する「小畑一九五九」。

(2) 「飛錫碑文」や「行狀」より後の時期に作成された「貞元錄」〔卷一五、八八一頁〕や「唐大興善寺故大宏教大辯正三藏和尚影堂碣銘并序」〔全唐文〕卷五〇六〕では、スリランカ(南天竺師子国)出身とあって、不空の出身に關しては諸説あるが、大方の研究が「飛錫碑文」や「行狀」に基づきソグド系の人物とみている。

(3) 「西良府」を周一良氏は涼州に比定している「Chou 1945, pp.321-322」。

(4) 「行狀」中の母親が康氏という箇所は、不空がソグド人の血を引くことを示す唯一の典拠であるが、「行狀」には後世に付け加えられた箇所があると考える研究者もいることから「岩本一九九六」、この点は慎重を期さねばならぬ。

(5) 藤善真澄氏は、不空の涼州訪問の時期を、複数の伝記史料を比較・検討し、天寶十三載初めとした「藤善一九八八、三六九—三七〇頁」。筆者もこれに従う。

第八十九卷 三二二

(6) 『舊唐書』卷一〇四・『新唐書』卷一三五 哥舒翰伝。
(7) 十二載、勅令赴河瀧節度御史大夫哥舒翰所請。十三載、到武威住開元寺。節度已下至于一命、皆授灌頂。士庶之類、數千人衆、咸登道場。

(8) 吳玉貴一九九七、三〇〇—三〇一頁。また、隋から唐初における安氏一族の安修仁・安興貴のソグド人の勢力・軍団については、山下将司二〇〇五を参照。

(9) 一般に涼州の安氏一族は祆教を信奉していたとされるが、一族には雪獻法師のような仏教僧侶もみられる〔涼州衛大雲寺古刹功德碑〕(『金石萃編』卷六九) Cf. 陳二〇〇二、八九頁／陳・劉二〇〇六、三三二—三三二頁。陳・劉兩氏は、李抱玉の父である安思敬の代(六六一—七二六年)になると、先祖を仏教僧侶として著名な安息国出身の安世高に偽託するようになることから、このころから仏教を信奉するようになっていたとみている〔陳二〇〇二、九三—九四頁／陳・劉二〇〇六、三三四—三三五頁〕。こういったことから、不空が涼州に招聘されたときには、既に安氏一族には仏教受容の基盤があったとみられる。

(10) 宰臣百辟、曾受法印者、罔不哀慟、門人勅常修功德使檢校殿中監大興善寺沙門大濟等四部弟子凡數萬人、痛大夜之還昏、悲慧燈之永滅。

(11) 密教では各尊に特定の印相を配当し、行者がそれを結ぶことによつてその尊格と身体的同一を達成する身密行が重視された。

(12) 不空は、肅宗の頃、皇后張氏の支持を得ていたことや〔中田二〇〇六、四四頁〕、皇后張氏の祖母(玄宗の母昭成皇太後の妹)の代に鄧国夫人に封じられていることなどから、皇后張氏の一族の女性である可能性が高い。

(13) 王緒・杜鴻漸は元載同様に崇仏家として知られ、不空の五臺山仏教事業を推進している〔Cf. 『資治通鑑』卷二二四 大曆一(七六七) 年秋七月条〕。

(14) 羅姓は、トハリースタン(吐火羅)出身の姓という可能性もあるが、敦煌周辺にあったソグド人集落中で、数多くみられた姓の一つであり〔池田一九六五、六一頁〕、敦煌・トルファン出土の文献に見える羅姓の人名は、多くがソグド人と同じ名前であることから〔吉田一九九八、三七頁〕、ここでは便宜上ソグド姓のひとつとしてみなしている。

(15) 化度寺護國萬菩薩堂、竝依臺山文殊所見。乘雲駕象凌乱極梁、光明滿堂不異金闕。

(16) 『表制集』卷五「故功德使涼國公李將軍挽歌詞二首」

(17) この勅牒は、不空の『仁王經』翻訳への寄付を申し出

た杜中丞の上奏に対する認可を下したもので、そのなかに「…委新龍武軍將軍李元琮勾當」とある。

- (18) 両者が同一人物である点については、塚本一九三三(一九七五、二八二頁、注3)、藤善一九八八、三七一一三七六頁。

- (19) 『表制集』卷二「請臺山五寺度人抽僧制一首」。

- (20) 『資治通鑑』卷二二三 廣徳二(七六四)年正月丙午の顔真卿の上言によれば、懷恩の謀反を論じ立てているのは辛雲京・駱奉仙・李抱玉・魚朝恩の四人だけであるという「友永一九九四、一五頁」。

- (21) これは、辛雲京・李抱玉のもとに史朝義配下の李宝臣(張忠志)・薛嵩がそれぞれの領地を携えて投降したにもかかわらず、懷恩が専断で李宝臣・薛嵩に再びそれらを管轄させたことがきっかけであった『資治通鑑』卷二二一 寶應元年、友永一九九四、二二頁。

- (22) 『資治通鑑』卷二二三 廣徳元年七〇八月条「初、僕固懷恩受詔與回紇可汗相見於太原。河東節度使辛雲京以可汗乃懷恩壻、恐其合謀襲軍府、閉城自守、亦不犒師。及史朝義既平、詔懷恩送可汗出塞、往來過太原、雲京亦閉城不與相聞。懷恩怒、具表其狀、不報。懷恩將朔方兵數萬屯汾州、使其子御史大夫瑒將萬人屯榆次、裨將李光逸等屯祁縣、李

懷光等屯晉州、張維嶽等屯沁州。…

- 中使駱奉仙至太原、雲京厚結之、爲言懷恩與回紇連謀、反狀已露。…八月、癸未、奉仙至長安、奏懷恩謀反。懷恩亦具奏其狀、請誅雲京・奉仙、上兩無所問、優詔和解之。」

- (23) 廣徳初、(駱奉仙)監僕固懷恩軍者。『新唐書』卷二〇七 駱奉仙伝」

- (24) 『資治通鑑』卷二二三 廣徳元年八月条「臣昨奉詔送可汗歸國、傾竭家貲、俾之上道。行至山北、雲京・奉仙閉城不出祇迎、仍令潛行竊盜。回紇怨怒、亟欲縱兵、臣力爲彌縫、方得出塞。雲京・奉仙恐臣先有奏論、遂復妄稱設備、與李抱玉共相組織。…」

- (25) なお、『舊唐書』卷一一一 僕固懷恩伝及び『全唐文』卷四三二 僕固懷恩「陳上表」に、広徳元年八月二十三日の僕固懷恩による上表文の全文が収録されている。

- (26) 閑と廐は、唐初は異なる概念として廐のほうが閑よりも大きな規模を指していたが、唐中期になるとほぼ同じものになっていたとみられている「趙一九九一、一二八頁注②」。

- (27) 安史の乱や吐蕃の侵入などによって地方の監牧は喪失していくが、李輔国の時期は、隴右はまだ吐蕃の支配下になかったので、隴右群牧都使はまだ機能していたとみられ

る。

(28) 森安孝夫氏は、安氏一族は河西にある馬の特産地を押さえていることが窺えることから、彼らの家業は東西貿易だけではなく馬の飼育と売買も含まれていたとみている【森安二〇〇七、一三五—一三六頁】。

(29) また、安氏一族が牧畜を行っていた点については、山下将司氏が中央アジア学フォーラム（二〇〇六年十二月十六日 於大阪大学）で報告している。

(30) 『表制集』巻一「請於興善寺置灌頂道場狀一首 并墨敕」（肅宗乾元三（七六〇）年閏四月十四日付けの史元琮による上奏とそれにたいする墨勅）。このときの史元琮の肩書きは「苑都巡使禦侮校尉・右内率府率員外置同正員・賜紫金魚袋・内飛龍驅使」である。拙稿二〇〇六では「内飛龍驅使」を飛龍使ととらえ、史元琮を宦官とみなした。

(31) ただし、安史の乱が治まりかけた七六〇年代から吐蕃が次第に河西地域に進出するようになることから、実際は、飛龍廐への河西方面からの馬の供給は間もなく行なわれなくなったとみられる。

(32) 『舊唐書』卷四四 職官志三 肅宗在鳳翔、方收京城、又置衙前射生手千餘人、謂之左右英武軍、非六軍之例也。

『新唐書』卷五十 兵志 擇便騎射者置衙前射生手千人、亦

曰供奉射生官、又曰殿前射生、分左・右廂、總號曰左右英武軍。

(33) 杜甫は至徳二載閏八月一日まで鳳翔におり、その後家族の疎開先鄜州に移っており、この詩は杜甫が鄜州で得た情報に基づき作成された【吉川一九八〇、三五—三七五頁】。

(34) 居延海の北三百里に花門山堡があり【『新唐書』卷四十 地理志」、北方民族の侵入を防ぐために堡壘が設けられていたが、ウイグルが占拠してからは「花門」はウイグルの異称となった【Cf. 孟一九九三】。

(35) チャカルについての研究は多数あり、紙幅の都合上全てを挙げることはできないが、前嶋一九六五【四一九—四二二頁】では拓（柘）羯の原語をめぐる先行研究がまとめられている。これ以降のものとしては Beckwith 1984 や De La Vaissière 2005 など が挙げられよう。

(36) 当時、ソグディアナの諸国が弱体化していたため、軍隊を送ることは難しいとみられるが、わずか一年後の乾元元（七五八）年七月に、吐火羅葉護烏那多とソグディアナの「九國首領」が来朝し安史軍討伐の協力を申し出ていることから【『冊府元龜』卷九七三 外臣部 助國討伐、「拓羯」がソグディアナ諸国から派遣されたチャカルを指す可

能性も捨てきれない。

(37) 代宗即位、以射生軍入禁中清難、皆賜名寶應功臣。故射生軍又號寶應軍。

(38) 「唐故寶應功臣開府儀同三司試太常卿上柱國隴西郡開國公兼射生使李府君墓誌銘」(『隋唐五代墓誌彙編』(天津古籍出版社) 陝西卷四、五〇頁。『唐代墓誌彙編統集』(上海古籍出版社)、七三三頁。『全唐文新編』(吉林文史出版社) 卷八、五四一二頁。『全唐文補遺』(三秦出版社) 卷一、三〇頁)。

(39) 何遊仙については、その子何文哲の墓誌銘中で取上げられている。Cf 李一九九六。「唐故銀青光祿大夫檢校工部尚書守右領軍衛上將軍兼御史大夫上柱國盧江郡開國公食邑二千戶贈太子少保何公墓誌銘」(『隋唐五代墓誌彙編』 陝西

卷四、一〇七頁。『唐代墓誌彙編統集』、八九三—八九六頁。『全唐文新編』 卷十三、八七〇七—八七一〇頁。『全唐文補遺』 卷一、二八二—二八六頁)。

(40) 賂元光については、榮二〇〇三、一〇六頁に詳しい。また、『舊唐書』 卷一四四・『新唐書』 卷一五六の李元諒伝以外に、以下のものがある。「李元諒頌」(『金石萃編』 卷一〇三)、「唐故華州潼關鎮國軍隴右僕射兼華州刺史御史大夫武康郡王贈司空李公墓誌銘」(『隋唐五代墓誌彙編』 陝西卷四、五六頁。『新中国出土墓誌』(文物出版社) 陝西一・下冊、一三七—一三八頁。『唐代墓誌彙編統集』、七五四—七五五頁。『全唐文新編』 卷八、五三九九—五三四〇頁。『全唐文補遺』 卷三、一二八一—一三〇頁)。